

新方遺跡発掘調査概要

1977

神戸市教育委員会

目 次

I	環 境.....	2頁
II	経 過.....	4頁
III	調査概要.....	5頁
	a. A 地点.....	5頁
	b. B 地点.....	9頁
	第1図 新方遺跡周辺の弥生遺跡分布図.....	3頁
	第2図 新方遺跡近傍図.....	4頁
	第3図 A地点トレンチ設定図.....	6頁
	第4図 A地点第2トレンチ北壁断面図.....	7頁
	第5図 A地点出土の弥生土器.....	8頁
	第6図 B地点出土の弥生土器.....	9頁
	第7図 B地点トレンチ設定図.....	10頁
	第8図 B地点断面図.....	11頁
	第1表 新方遺跡周辺の弥生遺跡.....	2頁
図 版	(1) A地点第2トレンチ・第3トレンチ全景.....	12頁
	(2) A地点第5トレンチ全景.....	12頁
	(3) A地点第1トレンチ北端の溝断面.....	13頁
	(4) A地点第2トレンチの溝断面図.....	13頁
	(5) B地点1坪北断面.....	14頁
	(6) B地点2坪南断面.....	14頁
	(7) B地点3坪南断面.....	15頁
	(8) B地点3坪剣状木製品出土状況.....	15頁
	(9) B地点出土の木製品.....	16頁

例 言

本書は、神戸市教育委員会が国庫補助事業として実施した神戸市垂水区玉津町新方遺跡の発掘調査概要である。(総額2,580,000円、補助率50%)

調査は、神戸市教育委員会文化課学芸員浅岡俊夫が担当し、昭和52年1月10日より3月31日まで実施した。

遺物整理および概要作成には喜谷、丸山、宮本、田中、国枝があたり喜谷がとりまとめた。

調査にあたっては地主の小林武雄・安井義和両氏をはじめ多くの方々の協力を得た。記して感謝の意を表したい。

発掘調査参加者

河本健介・喜谷美宜・奥田哲通・宮本信雄
中村啓則・丸山潔・宮本博・田中一
国枝広之

I. 環 境

播磨平野の東部を流れる明石川は、神戸市北区山田町藍那付近に源を発して支流の柳谷川・伊川などを合流しながら明石海峡にそそいでいる。

明石川流域の遺跡は、近年の開発事業に関連して著しくその量と内容を増加させつつある。

旧石器・縄文時代の遺跡については、まだ、それほど内容は豊富ではないが、弥生時代以降の遺跡は調査例も徐々に増えてきている。

新方遺跡の所在する明石川下流域で最も古い弥生遺跡は、新方の西方約1.2キロメートルの位置にある吉田遺跡である。この吉田遺跡は、すでに学界で著名なように、明石川流域で最も古い弥生遺跡であるばかりでなく、播磨全域においても最古の遺跡であることはいうまでもない。

今回調査の対象となった新方遺跡は、吉田に続く弥生時代前期中葉に出現した遺跡で、おそらく吉田からの分村によって成立した集落であろう（この事実は今回の調査によって明らかになった事実である）。

弥生時代前期後半になると、さらに集落の数は増加し、吉田遺跡の南約700メートルの同じ丘陵上に片山の集落が出現し、さらに明石川を逆上すること約2キロメートルの位置に居住の集落が成立する。

弥生時代中期になると、さらに遺跡の数は増加し、河川流域の上流へと逆上ってゆく。

明石川下流域の弥生遺跡は下表の通りである。

〈第1表 新方遺跡周辺の弥生遺跡〉

遺 跡 名	所 在 地	時 期					立地・標高
		I	II	III	IV	V	
1 上の丸2丁目	明石市明石公園内						洪積段丘中位 26m
2 上の丸3丁目	明石市明石公園内						洪積段丘下位 20m
3 新 方	神戸市垂水区玉津町新方・西河原						氾濫平野 8m
4 宝 来	神戸市垂水区玉津町宝来						洪積段丘下位 20m
5 今 津	神戸市垂水区玉津町今津						洪積段丘下位 25m
6 今津中学校庭	神戸市垂水区玉津町今津						洪積段丘下位 25m
7 荒 田	神戸市垂水区玉津町潤和						丘 峰 65m
8 明石禮信館院南	神戸市垂水区玉津町大谷						丘 陵 65m
9 片 山	神戸市垂水区玉津町枝吉1丁目						洪積段丘中位 20m
10 鳥 羽	神戸市垂水区玉津町枝吉3丁目						洪積段丘中位 22m
11 前 池	神戸市垂水区玉津町枝吉4丁目						後背低地 7.5m
12 吉 田	神戸市垂水区玉津町枝吉1丁目						洪積段丘中位 20m
13 居 住	神戸市垂水区玉津町居住						氾濫平野 15m



第1図 新方遺跡周辺の弥生遺跡分布図
(数字は第1表と同じ)

II. 経 過

新方遺跡は、神戸市垂水区玉津町新方および西河原に所在する遺跡で、明石川下流の東岸に近い海岸平野に立地している。

この地域に遺跡が存在することが知られたのは、山陽新幹線建設工事に先立つ分布調査においてであった。

昭和45年度には兵庫県教育委員会等によって新幹線々路部分の発掘調査が実施され、弥生時代から奈良・平安時代にいたる遺跡であることが知られたが、この調査においてもその後の小規模な調査においても住居址などの遺構は発見されず現在にいたっている。

近年の都市周辺の市街化の波は、新方遺跡の周辺へも容赦なくおしよせ、最近は住宅・倉庫建設等がこの地区でも目立って多くなってきたので、遺跡の範囲を確認し、保存策を講ずべく、今回の調査が計画された。従来遺跡の範囲は新幹線の軌道が明石から桟谷へ通ずる小部・明石線あたりを東端として、西は明石川に近いあたりまで遺物が散布しているが、中心は小部・明石線に近いあたり（字新方）だろうと推定されていた。その後の小規模な調査では字西河原にも土師器を伴うピットが存在することなどが知られていたが遺跡の全貌は不明のままで今日にいたっていた。



第2図 新方遺跡近傍図 (A・B地点は今回調査, Cは昭和45年調査)

III. 調査概要

a. A 地点

今回の調査は、第2図の如くA、B 2地点においておこなわれた。A 地点は、明石川に最も近い水田がすでに埋め立てられ、民家が建っているためその東側の水田にトレンチを設定した。

この地点は、以前に土師器を伴うピットが発見されたところに近く、遺構が発見されていたが、住居址などの遺構は発見されなかつた。しかし、古墳時代の遺跡の西北辺を限るのではないかと推定される溝が検出できたことは大きな成果であった。

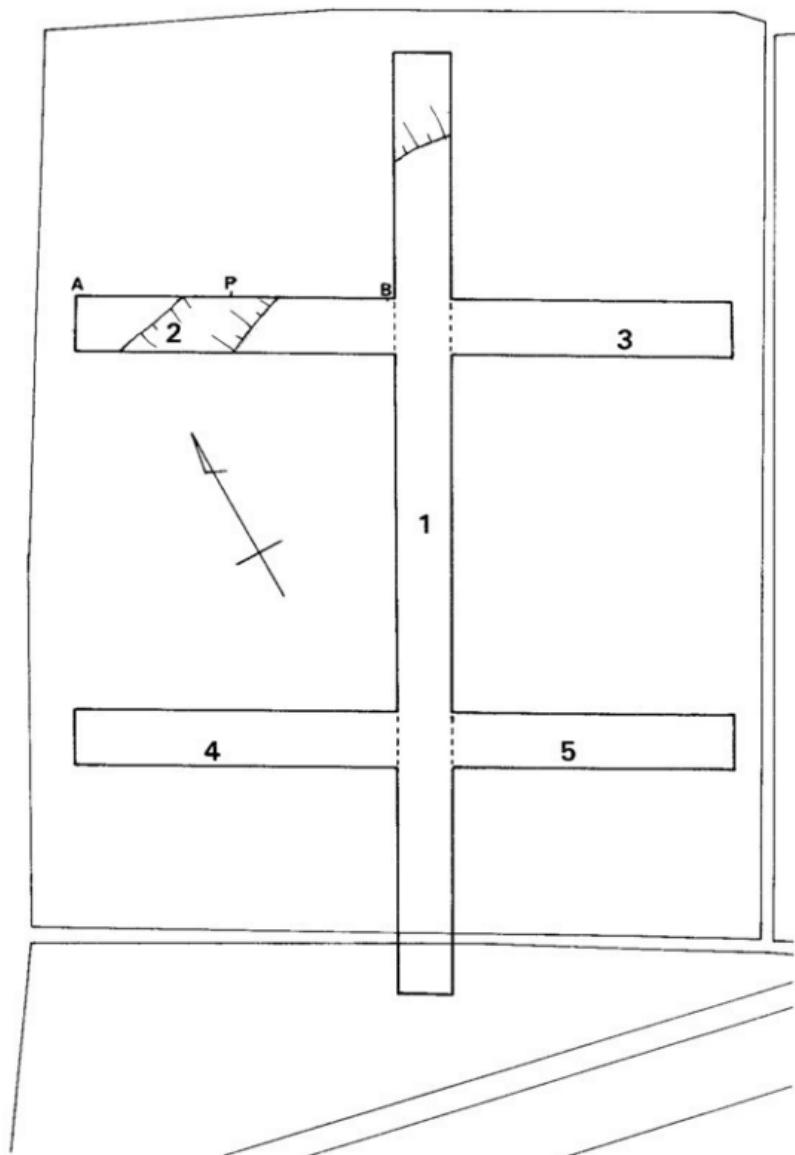
また、遺構に伴う遺物ではないが、トレンチの南半から弥生時代前期の遺物が発見されたことは、新方遺跡の成立時期を從来の知見よりも、さらに逆上らせた点で重要な発見である。（これまでには、弥生時代中期以降の遺物が報告されていたが、一部研究者の間では弥生時代後半まで逆上するだろうことが予測されていた。）

各トレンチの上層は、いずれも1メートルから1.5メートルで基盤の灰黄色砂層に達するが、その間に10層前後の十層の堆積がみとめられる。第4図にその上層の一部を示したが、溝状の遺構は先に述べたように土師器を伴う古墳時代の遺構と推定されている。しかるに、弥生時代前期の遺物はこの溝が掘り込まれている十層より上層（図にbで示した層）に含まれている。しかも上層は磨滅がはげしく2次的堆積であることを示している。したがって弥生時代前期の生活址は、この地点よりも上流であったことが推定できる。

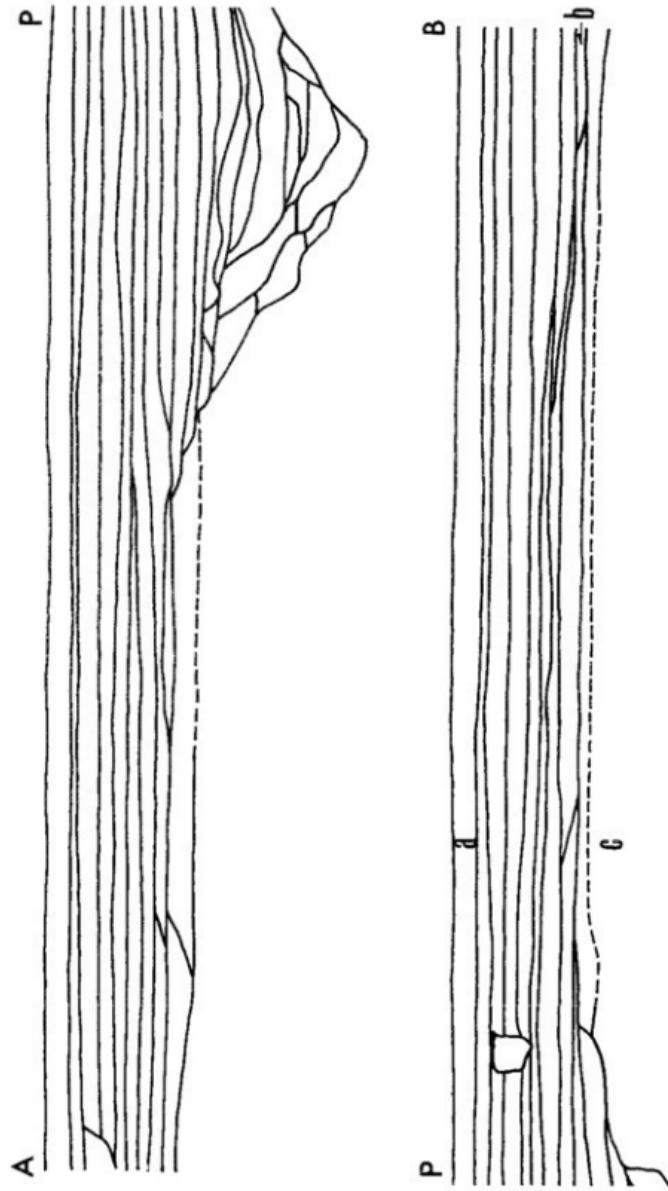
おそらくA地点より北へ約200メートルの地点で明石川と合流する天上川の氾濫によってもたらされたものであろう。

A地点出土の弥生時代前期の土器は壺・甕・鉢・蓋などの器形が認められるが、段を有するものがない。壺（1・5）甕（11）とともに削り出し突帯が認められ、多条のものが少く、貼り付け突帯を含まないところから、弥生時代前期のうち中葉に属するものであることが知られる。

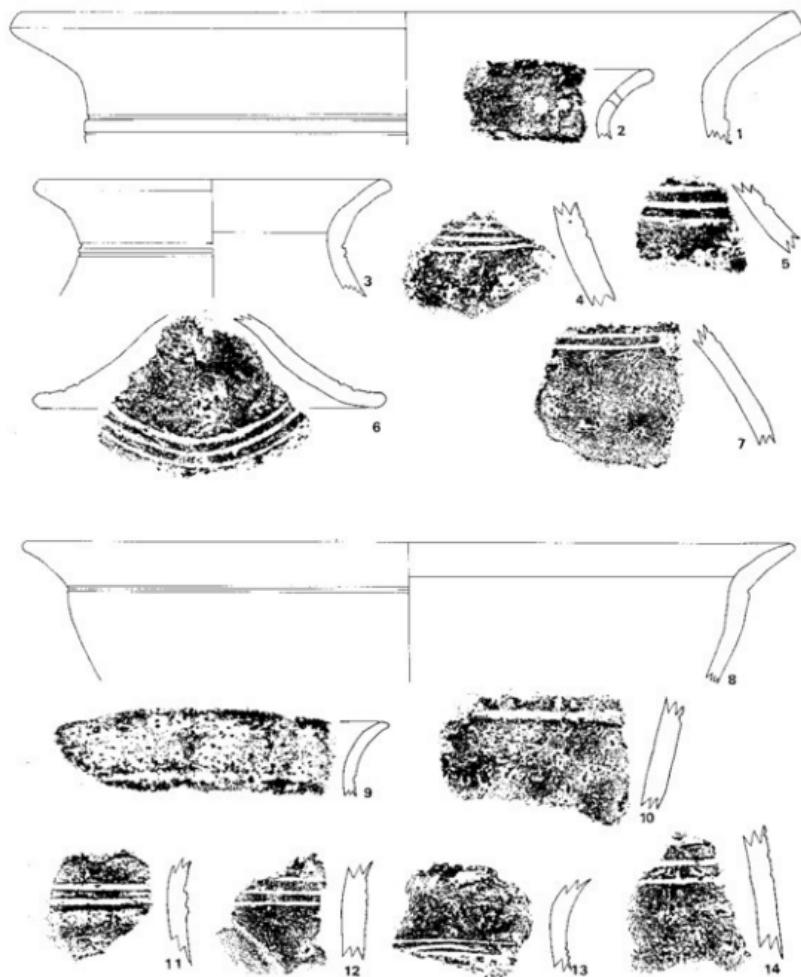
この発見によって明石川下流域の東岸で、弥生時代前期中葉に稻作農期が開始されたことが明らかになった。この遺跡は、おそらく西岸の丘陵上に位置する吉田遺跡からの分村によって成立したものであろう。



第3図 A地点トレーンチ設定図 ($S = \frac{1}{50}$)



第4図 A地点第2トレンチ北壁断面図 (a.耕土, b.発生包含層, c.地山)



第5図 A地点出土の弥生土器 ($S = \frac{1}{2}$)

b. B 地点

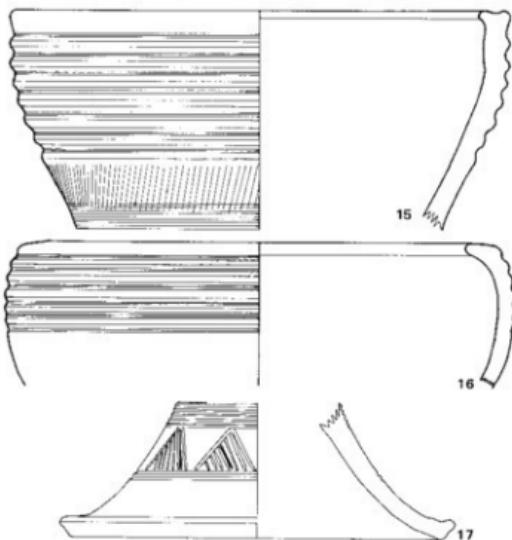
A 地点より東へ約 200 メートルはなれた地点に南北に 3 カ所の坪を設定した。いずれも 3 メートル前後で青灰色の砂層あるいは砂礫層に達し、これが基盤層(図に C で示した層)であることが確認できた。

第 6 図に示した如く 1・2 坪ではこの基盤層が西から東へむかって傾斜し、3 坪でも同じような傾向が認められたが、この傾斜の直上に弥生土器の包含層(図に a で示した層)が認められ、その上からは、土師器・須恵器等が認められた。特に 3 坪の b で示した層からは奈良・平安時代と推定される木器類が出土した。

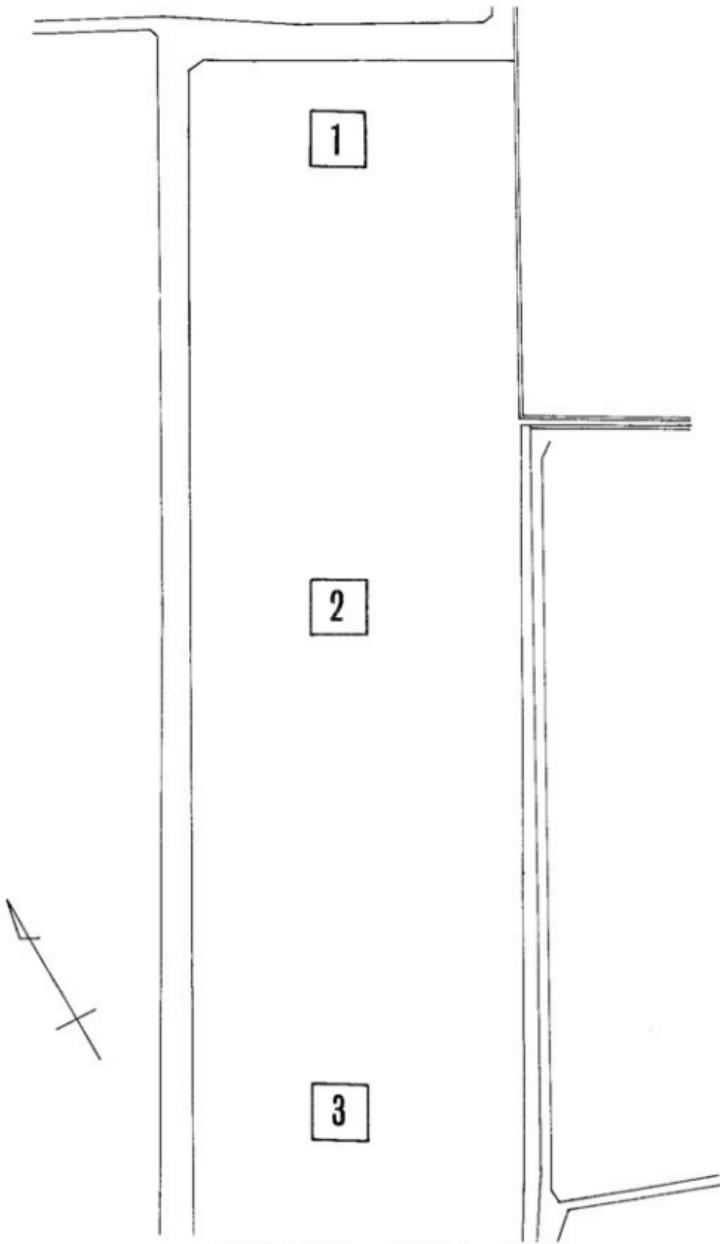
B 区から出土する弥生土器は、畿内第 2・第 3 様式に属すると考えられる櫛描文土器片、第 4 様式に属する凹線文土器(第 8 図)などで A 地点とは時期的に異なったものばかりであり、さらに東側の昭和 45 年度調査地点の遺物と同時期のものである。

3 坪から出土した木製品は、用途不明のものが多いが、少量ながら剣状の土製品・斎車状木製品・人形様木製品などが含まれている。これらの木製品については元興寺仏教民俗資料研究所に依頼して保存処理および材質鑑定を行った。

木器の材質はスギ・ヒノキ・マツ・ヤナギ・コナラなどが認められたがその一部を記すと、剣状木製品・斎車状木製品・人形様木製品はいずれもヒノキであることが明らかになった。



第 6 図 B 地点出土の弥生土器 ($S = \frac{1}{2}$)



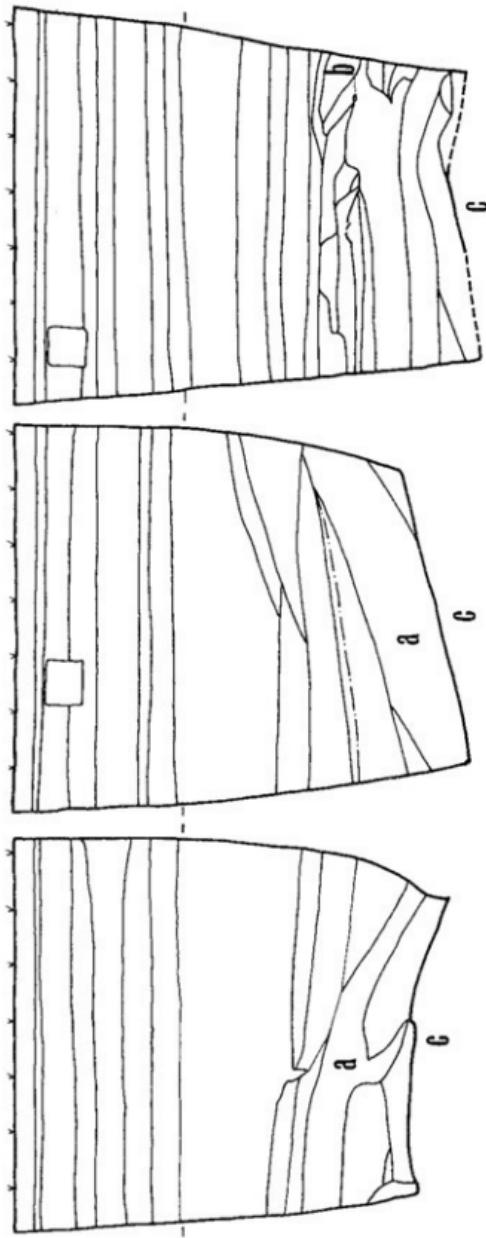
第7図 B地点トレント設定図 ($S = \frac{1}{30}$)

3 坪南断面図

2 坪南断面図

1 坪北断面図

第 8 図 B 地点断面図 (いずれも $S = \frac{1}{40}$)

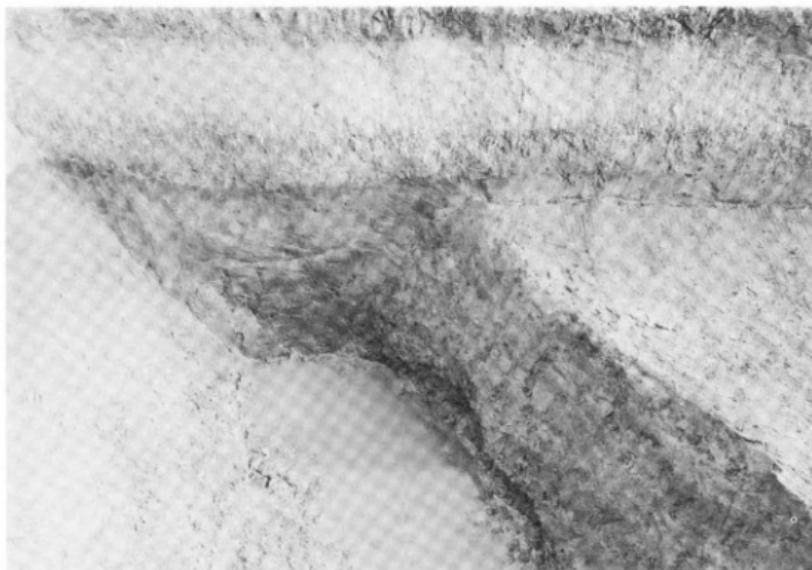




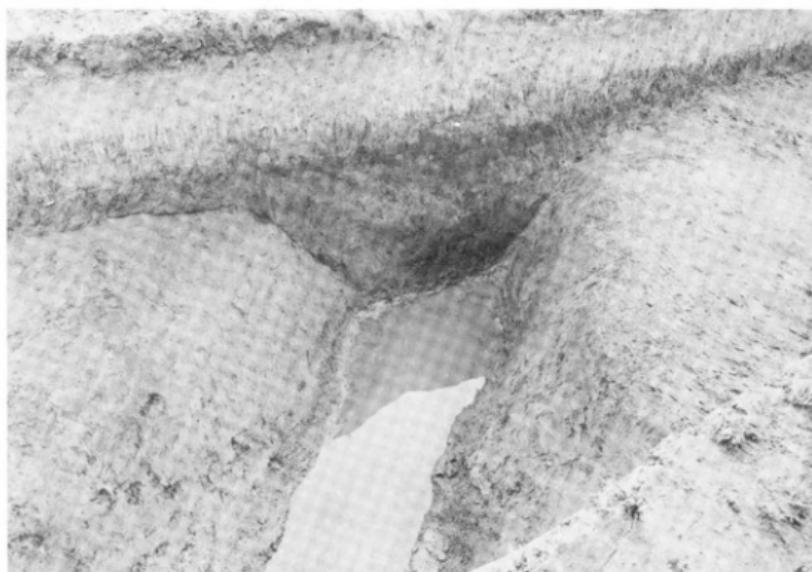
(1) A 地点 第2トレンチ・第3トレンチ全景（西から）



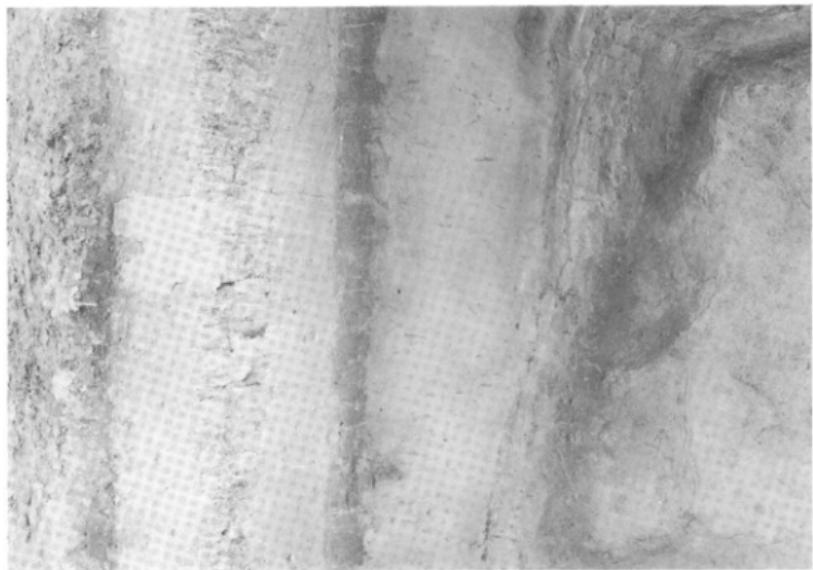
(2) A 地点 第5トレンチ全景（東から）



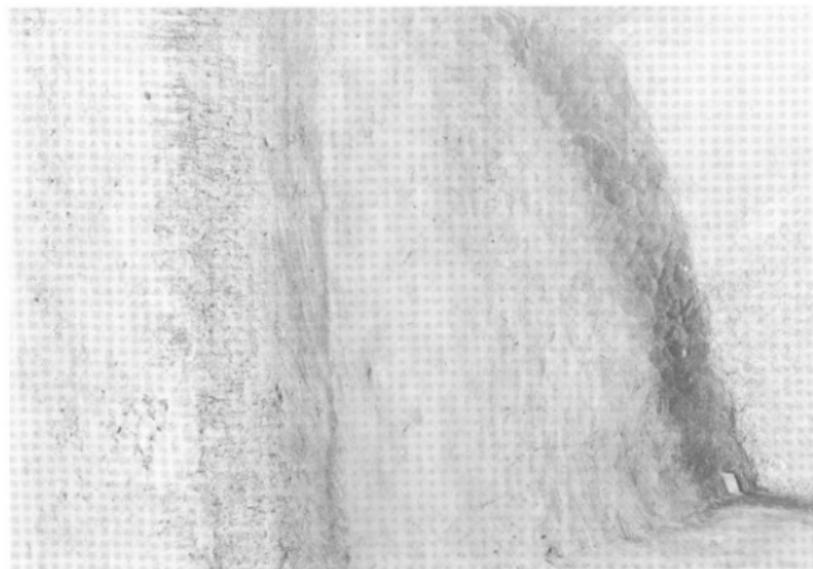
(3) A 地点 第 1 トレンチ北端の溝断面



(4) A 地点 第 2 トレンチの溝断面

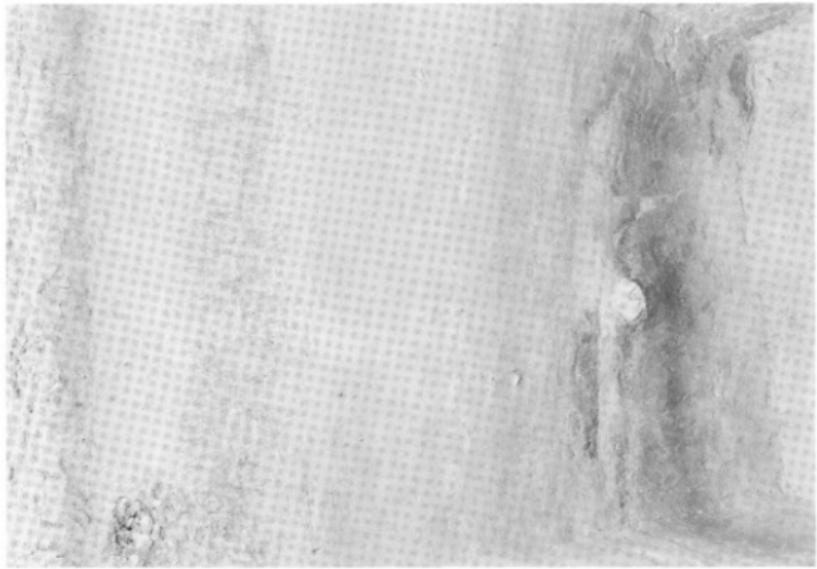


(5) B 地点 1 坪北断面



(6) B 地点 2 坪南断面

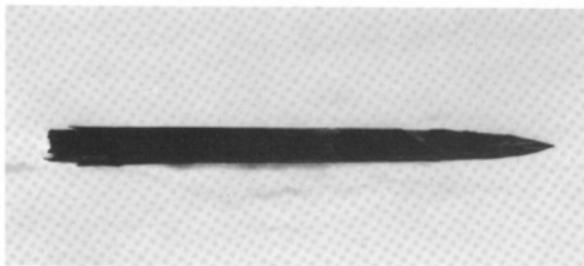
(7) B 地点 3 坪南断面



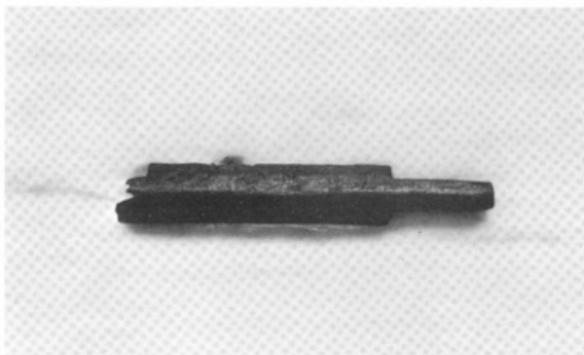
(8) B 地点 3 坪南木制品出土状况



畜半状木製品

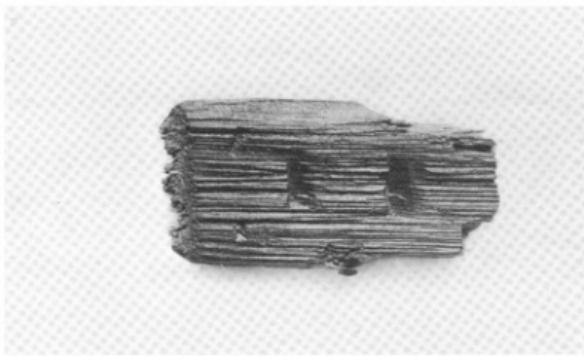


刺状木製品



(9) B地点出土の木製品

人形様木製品



新方遺跡発掘調査概要

編集発行 神戸市教育委員会 文化課

発行日 1977年3月

印刷 桜原出版印刷